

名 称	北九州市立青少年ボランティアステーション
所 在 地	〒804-0067 北九州市戸畑区汐井町1番6号 ウエルとばた3F
連 絡 先	TEL : 093-871-0330 FAX : 093-871-0370 URL : http://www.city.kitakyushu.jp/ (北九州市ホームページ)

地域の現況・特色

活動対象地域の人口 北九州市 993,000人

本市は九州の北部に位置し、七つの区から構成される都市である。1963年の5市対等合併により誕生した九州初の政令都市で、合併当初は日本の四大工業地帯の一角を担い、高度成長の牽引役であった。近年、若年労働者の首都圏転出などにより、全国を上回るスピードで少子高齢化が進んでおり、市の重点施策においては「北九州方式による地域福祉」を掲げ、保健・福祉・医療に積極的に取り組んでいる。また、本市は新北九州空港の開設、港湾設備の拡充などをしてアジアに向けての玄関としての役割も担っている。

コーディネートした事例の名称、概要、特色

名称 家庭裁判所と連携した「課題を持つ青少年たちのボランティア体験」活動

当ボランティアステーション(以下、「ボラステ」)では、青少年の健全育成を目指し、本人の希望に基づくボランティア体験活動の場を提供している(平成17年度53施設2,109人参加)。また、「問題を抱える青少年の立ち直り対策」として、関係機関、学校などとも連携し、個別の課題に応じた活動も行っている。

本年度、家庭裁判所(以下、「家裁」)の14人の少年とその保護者を対象にしたボランティア体験活動を行った。

主な活動内容は、北九州市立玄海青年の家(以下、「青年の家」)の施設内にあるキャンプサイトの整備である。彼らは家庭裁判所調査官(以下、「調査官」)の勧めにより、希望しての参加だそうだが、「審判」の前でもありしぶしぶ参加していたようだった。そのため集まってきた少年や親の表情は硬かった。しかし、活動が進むにつれ表情も明るくなり、自主的な活動が見られるようになってきた。1日の作業が終わり、施設長や施設の指導員より感謝の言葉をもらった時、親子とも満足そうな顔をしていたのが印象的であった。

コーディネートの実際

家裁とは毎年ボランティア活動について話し合いをしているが、実施するのは初めてであった。そのため「申し出をすれば指導から報告まで全てやってくれる」など調査官の思いの違いから来る混乱があった。そこで3回にわたる事前の話し合いを持ち、調査官の考えを確かめながら私たちの立場なども理解してもらい、次のような打合せを行った。

1 ボランティアをさせる目的は、少年の調査のためか、ペナルティーとしてか、指導のためか

ボラステのコーディネーターは、ボランティアを希望する人の要望が達成されるための受入先をコーディネートしているが、場合によっては活動がスムーズに行えるよう一緒に行動することがある。今回、私たちは3人の職員を参加させて活動の指導を行っていく。しかし、少年の持つ背景を知らず人間関係も無い少年たちに対し、家裁が持つ目的達成のための個別指導やその報告をすることはできない。したがって調査や立ち直り指導については調査官自身でやって欲しい。

1日の活動で立ち直りの「結果を期待する」のではなく「きっかけの機会を与える」ことに主眼を置きたい。そのため、ペナルティーとしての活動であっても、きついとか辛い気持ちで終わらせず、「立ち直り」を目指す楽しいやりがいのある活動にしたい。

2 保護者を参加させる目的は

少年たちはいつも一緒に行動しており、同一の事件を起こした者ばかりなので、親同士が顔を合わせ、今後の子育てについて考えさせたいという思いから、親も参加させるようにしたということである。その目的を達成させるために「少年だけ」「親だけ」「親子一緒」の活動を取り入れて計画する。

3 場所はどこがよいか

「問題を抱える青少年の立ち直り支援」としてのボランティア活動を理解し問題行動を繰り返す少年を側面から指導できる人がいる、14人の少年とその保護者という多人数を受け入れて活動ができる場所がある、安全への配慮と交通の便がある等の条件を満たす施設として、青年の家をお願いすることにした。

4 調査官とボラステの当日の役割について確認

ボラステは、活動の流れ全体を受け持ち、参加する少年にボランティア保険をかける。

少年たちのボランティア活動以外の行動に対する指導は調査官がする。

以上の打合せを行った後、次のような実施案を作成した。

「課題を持つ青少年達のボランティア体験活動」実施案より

1 目的

- ・ 自尊感情の芽生えのきっかけを作る
(自分もやればできる。自分を見つめてくれる人がいる。自分も人の役に立つ)
- ・ 親、子がお互いを再発見する場を作る
(子どもの見方、接し方。親に対する感謝する心)
- ・ 人のため汗を流すことの健やかさを実感させる
(ボランティアの体験)

2 日時・参加者

Aグループ	8月26日(金)	少年7人、保護者7人、調査官2人、ボラステ3人
Bグループ	9月8日(木)	少年7人、保護者7人、調査官2人、ボラステ3人

3 スケジュール * ()は親の活動

9:00	玄海青年の家集合	名札書き(キャンプ名で)、ボラステTシャツ配布
9:30	作業開始	(親も一緒に)
10:40	作業	(食事の準備)
11:40	昼食	(少年と一緒に)
12:40	後片付け	(少年の片付け、食器洗い等を指導)
13:00	作業	(別室で親子関係について研修)
14:00	親子カヌー、雨天はウォーククライミング	(見学)
15:40	ボランティア活動の全体反省会	
16:00	青年の家所長よりお礼の言葉	解散

実施に当たって留意したこと

- * 食事は親自身が愛情の感じられる家庭料理を作り、それを子が見て一緒に味わう。
- * 食事の後片付けは、親子の共同作業でさせる。
- * 最初の所長あいさつは「目的」にかなう内容で。終わりは、感謝の気持ちを込めて。

活動の成果

活動後の感想文には、「今まで、その時だけ楽しめばいいと、自分のことばかり考えて行動していたが、人のためになる仕事を初めてしてとても気持ちがよかった。これから機会があれば人のためになることをしてみたい。」とか、「最初はボランティアと聞いて面倒くさいなと思っていたけど実際にやってみると意外に楽しくて集中して作業に取り組むことができた。人の役に立つことが普段ないのでいいことが出来たと思う。これからも人の役に立てるようなことをしていきたい。」「自分たちが作ったものは12年~13年くらいは持つということだったので、今から10年後になった際に自分の子どもに見せてあげられたらいいなと思った。」など、活動を通して、自己を見つめ直し、これからのことを考えた言葉が多く見られた。

また、親の言葉には「子どもが生き生きともの作りする姿を、小学校以来久しぶりに目にすることが出来てとても嬉しかった。」「普段ならきついつとか、辛いと口にでるのですが、まったく出さずに、エネルギーあふれた好奇心いっぱいの我が子を見て考えさせられました。」「この日からでしょうか、よく話しかけてくれ、優しく穏やかな会話が続いています。」などと、喪失していた親子関係を修復するきっかけにもなったようだ。

今後の課題

これからの連携のために調査官と事後の話し合いを持った。今回は大人数での活動であったが、これからはそれぞれの調査官が持つ少人数の活動も受けてほしい。特に女性のための受入先も考えてほしいなどの要望もいただいた。また、今後のボランティアの申込み・連絡等についてはそれぞれ担当者を置くようにした。

青年の家では、教育施設ということもあって趣旨と目的をすぐに理解してもらい、全面的な協力が得られた。そのため事前の具体的な打合せと当日の作業をスムーズに行うことがで

きた。今後、家裁の事情により活動日にあまり時間的な余裕がないお願いをすることもある
そうなので、ニーズに合わせるができる施設の開拓をしておかなければならない。



力を合わせてキャンプサイトを整備している少年たち



親の手作り昼食を親子そろっての食事風景

執筆者職・氏名：北九州市立青少年ボランティアステーション

体験活動コーディネーター 藤永 正治